

# 名 誉 代 表 挨 拶

**福 本 诱 士 氏**

**SGST 名誉代表（福山大学教授）**

**(塩見—中部大学)** 皆様こんにちは。本日、SGST25周年記念シンポジウムを土木学会中部支部、ならびに日本鋼構造協会の共催を得まして開催いたしましたところ、ご多用中にもかかわらず、多数ご参集いただきまして誠にありがとうございます。

定刻になりましたので、ただ今よりシンポジウムを始めたいと思います。申し遅れましたが、私、本日の司会進行を務めさせていただきます中部大学の塩見と申します。今回の実行委員長を仰せつかっております。どうかよろしく願いいたします。最初にSGST設立者で、現在は名誉代表の福本喆士福山大学教授から開会のごあいさつを申し上げます。福本先生よろしく願いします。

**(福本—福山大学)** ただ今ご紹介いただきました福本でございます。どうも名誉代表というのは、何だかふさわしくないような名前だと思いますけれども、決められておりますので、それに従いまして、少しご挨拶をさせていただきます。

ちょうど25周年ということになりますと、発足は1978年(昭和53年)ということで、私の当時の手帳を見ておりましたら、昭和53年6月23日金曜日に、SGSSグループの会を3時から開催するというメモが載っておりました。それで、今日ここへ来てから誰がそのとき出席していたのかということを見ておりました。順不同でございますが、長谷川彰夫さん、久保さん、青木さん、事口さん、宇佐美さん、それから長谷部さんです。事口さんのお話しですと、1年遅れて塩見さんが入れ、山田健太郎さんがメリーランド大学から帰ってこられ参加されたという形でございます。

25年前というと私は45歳でございます、宇佐美さんが35歳、私と宇佐美さんと伊藤義人さんは10年ずつ違いますので、伊藤さんが25歳ということになります。大体、25歳ぐらいから35歳ぐらいの方がいて、その当時はSGSS (Study Group of Steel Structures) という名前と呼んでいたわけでございます。

そういう人たちと、最初の会合を6月23日に行いましたので、丸25年ということになります。それから私の手帳によりますと、6月29日に東海地区構造懇談会を開くということがメモってありました。おそらく今から思いますと、鉄だけではなくコンクリート構造。ただし、対象は土木構造物でございますけれども、皆さん方の若い方はご存じないかも分かりませんが、京都大学の小西一郎教授が63歳の定年後、中部工業大学に在職中の65歳のときに、そういう会合をやりました。

先週の火曜日に急にお亡くなりになりました、成岡昌夫先生が60歳でした。それから岐阜大学の四野宮先生とか、信州大学の結城先生とかで、かなり年齢スパンがずっと広がっている人たちと、懇談会をやったという記憶です。場所は恐らく私学会館でやっていたと思います。

その後の25年は、いろいろなものが変わりました。幸いにも我々のおりました時期というのは、本四架橋その他も含めまして、橋梁については大変やるが多かったことでございます。

今までの25年を思い返しながら、これから先のことについて、皆さん方と、というよりも皆さん方がやっていただくということになってくるかと思えます。



先日、鎌倉の高僧の話として「ゆでガエル」の話を聞きました。常温のカエルを急に熱湯に入れると、びっくりして飛び上がって外へ飛び出してしまいますが、「ゆでガエル」というのは、カエルを水からだんだんと温度を加えて上げていくと、カエルは気が付かずにいるのだが、やがて死んでしまう、というようなことを言っておりました。これはいろいろな意味で通用するかと思いますが、我々が知らず知らずにその社会に入り込んでいくと、あとはもうそこへ取り込まれて死を待つだけだという、そういうようなことの戒めを、その高僧は言ったかと思います。25年が経ち、これからいろいろな形でまた新しい方向をお考えいただくということになるかと思います。

1978年に我々がSGSTを立ち上げたときは、アメリカのLRFDとヨーロッパのユーロコードの前のECCSというのが、ほぼ同じぐらいの進展状況のときでした。若い者でやろうということでしたので、今になってみると、やはり15年から20年ぐらいの差が付いてしまった状態で、大変に申し訳ないと思っております。これもひとえに人のやったことを評価して、アプルーブするというトレーニングが、我々ができていなくて、やはり同じように並べると、ついつい色を混ぜると白色になってしまうということではなかろうかと思えます。

今日は「土木構造物と環境」ということで、最初に基調講演として藤野先生と川人さんのお2人のお話を聞き、後はパネルディスカッションということで、最後までご静聴いただくよう、よろしく願いいたします。